

歴史探訪

クラブ

History Inquiry Club



文化財課 ☎23局3635
FAX 22局3811

「伊良湖白」の謎

渥美半島の産物のひとつに「伊良湖白」という碁石があったことを、歴史探訪クラブ其の80と134で少し触れました。

松尾芭蕉の『笈の小文』の中に、「保美村より伊良古崎へ壺里計も有べし。(中略)此洲崎にて碁石を拾ふ。世にいらご白といふとかや」と書かれ、『三河国名所図絵』にも「表浜のチョウセンハマグリは白い碁石に使用され、伊良胡白と呼ばれ、那智黒と並び称された」と書かれていま

す。しかし、情報が少ないため、本当にそのような産物があったのかという疑問がありました。

平成23年、福江町市街地にある江戸時代からの大きな商家跡地の遺跡(弥生〜古墳時代)を発掘調査しました。調査前には、壊れた茶碗のかけらや生活の道具とともに、チョウセンハマグリのかげらがたくさん落ちていました。つるつるになったものもあるのですが、海岸で拾ってきたものだとすぐわかりました。このような貝の破片は、渥美半島の縄文時代の貝塚からたくさん見つかります。このチョウセンハマグリのかげらは、使い方が分からない縄文時代の道具



▲福江町の商家跡地で見つかったチョウセンハマグリのかげら

として知られていますので、新発見の遺跡があるのではと小躍りしました。しかし、貝は新しいもので、この家の住人が趣味で集めていたものかと、深くは考えませんでした。

野信仰とのつながりがある渥美半島の海で洗われ清らかになった「石」は、碁石としてだけでなく、那智黒とともに別の付加価値があったからこそ「伊良湖白」が選ばれたのかもしれない。

話が変わり、昨年末、赤羽根町の方と昔のことを雑談していた際に、「伊良湖白」のことを話すと、次のような話をしてくれました。その方のお父さんは、チョウセンハマグリのかげらを集めて売っていました。海がやせてその貝殻を見なくなり、売らなくなりました。戦後までは、商品として流通していたようです。残念ながら詳しいことは分からず、まだ調査不足ですが、福江町の商家跡でたくさん見つかった貝は、もしかしたら売らためて拾ってきたものかもしれません。

しかし、今では採れなくなった理由が、打ち上がる浜がなくなっただけでなく、環境悪化でチョウセンハマグリ自体がいなくなったとすると、それは悲しいことですね。



●表浜に散らばる貝殻

今月の「表紙」

▼桜舞い散る季節。この号を最後に、5年間の広報編集から離れます。「表紙が楽しみ」の声に励まされ、気合いを入れて撮影していた表紙写真。皆さまのお陰で、平成24年度県広報コンクールで特選を受賞できました。広報を通して知り合った方々は、何よりも「宝物」です。ありがとうございました。(OH)

【表紙の写真】河津桜と菜の花